

当事者の声を、そのまま届けます

ここに登場するのは、障がいのある人、外国にルーツを持つ人。それぞれが、自分を大切にしながら、周囲と関わってきた経験を自分たちのコトバで語ってくれました。「理解してほしい」「こうしてほしい」と訴えるためではありません。「こう感じた」という声に、耳を傾けるきっかけとして、紹介します。

特集

うるま日記

各課のお便り
25th Anniversary
うるまの
情報

自分の「好き」を突き詰めていけば
自分のことも好きになれるはず！

人も物事も多面的。決めつけないで
接すれば、社会はもっと優しくなれる！

©HeartY Museum / 左からバニーさん、マリーさん、仲嶺(旧姓 喜納)翼選手、シェリーさん

小学生ぐらいから 『周りと自分の違い』を 意識させられた(シェリー)

●どんな子ども時代を過ごしましたか？

仲嶺(旧姓 喜納)翼選手:とっても「うーまー」でした。動き回ることが好きで、バスケット部に入ってから部活一筋に。真面目でもあったので、部活をやるからには勉強もおろそかにできないと、文武両道を目指していました。

シェリー:私かというと、この見た目から「英語も話せるし、スポーツも勉強もできるでしょう」と思われがちだったのですが、どれも全く得意ではありませんでした。そんな中でも好きだったことが料理と歌。それは今でも変わらないです。

バニー:私は規則や規定など、決められたことに従うことが大嫌い、それゆえ学校も基本的に嫌いでした。一方で好きなことには熱中するタイプで、シェリーと同じく歌うことが好きでしたね。

マリー:私とはとにかくずっと動いているような子でした。運動神経も比較的良好だったと思います。休み時間は外で遊んだり部活に精を出したり。その反面、勉強は全くダメでした。

シェリー:それぞればらばらの性格でしたが、全員歌が好きになったのは両親の影響です。私たちが歌って聞かされると手放しで褒めてくれるんです。人前で何かを表現することの喜びを覚えたのも、そのおかげだったように感じます。